

## 第二十四地区シベリア原生林

新潟県 高橋 算

### 一、B 29 の空爆

初年兵教育が終わった私は、昭和十九年四月初めに古年兵とともに五人で新京第三建設団花井隊へ転属した。軍属と現地人主体の築城建設部隊であった。新京で他部隊から来た兵と合流して約三十名、ソ満国境へ向けて出発した。興安嶺を越えて、免渡河駅から現地人の馬車に乗って現場の山小屋兵舎に着いた。

そこで軍服を脱ぎ、真っ黒な満服を着て全員満人となり、帽子は戦闘帽に<sup>(和)</sup>と書いた布を星のマークと付けかえたので、下士官も兵もわからなくなった。

二キロばかり離れた小山の上に機関銃トーチカ建造が始まっていた。毎日満人とともに馬車でセメントやバラス、水などを運び、一見のんびりした風景であった。頂上からソ連側を見ると、水の流れないような

大きな川の向こうに、双眼鏡で見るとソ連のトーチカが見える。その川は国境であった。

私のいるところは満州最北端で、ウヌウルというところであった。軍属、満人とも百名近くいた。四、五日すると私は隊長に呼ばれて、将校当番を命ぜられた。将校は五名で、隊長のほか中尉一名、少尉二名、軍医一名で別棟の山小屋兵舎に住んでいた。中尉殿は、毎日写真機を持って出ていった。そして押し入れの中は写真機材でいっぱいであり、手をつけてはならないと注意された。

日本人は、毎日牛肉ばかり焼いたり煮たり食事で、十日もすると食べたくなくなった。軍医殿は毎回肉を残すようになって、ゴマ塩をつくらせ、それで食事をしていた。

昼間は仕事がないので草原へ出てみた。そこにワラビを見つけてきて塩漬けにしておいたら、見つけられて全部食われてしまった。炊事場から卵をもらってきて目玉焼きをつくって隊長殿に出したら、笑顔を見せてくれて私も気持ちが軽くなった。

ある日、草原の中でヒバリが飛び上がった。下りたりするのを見つ、巢を探し、一羽の親鳥をつかまえることができた。早速鳥かごを作って入れ、飯粒を指先につけて出すと、二日目には食うようになった。戸を閉めて部屋の中に放つと、食事をしている将校殿の肩や茶碗にとまるようになり、笑顔で食事ができるようになったが、あるとき軍医殿が塩辛を食わせ、間もなく死んだ。軍医殿は謝っていた。

そんなある日、突然、南満州地区へ転属命令が出て、八人ばかり満鉄で南下した。アメリカのB 29による空爆が始まったのだ。鞍山市の図書館の兵舎に着いたら、軍属の人たちが五、六十人いて、同居した。そして高射砲陣地築造に参加したが、慌ただしくなった。昭和十九年夏ごろであった。

今度は私一人だけ自動車修理場へ行くよう指示された。そこは、兵舎と離れた原っぱの中に車庫と部品倉庫があり、軍属の主任と軍属の人とともに七名であり、毎日故障車が来るので慌ただしかった。そして、軍属の方々にも軍隊並みに階級があり、主任はたしか伍長

だったと思う。

私の兵舎の隣に二階建ての大きな航空隊の兵舎があって、ある日B 29に空爆されて、半分近く飛び散った。そのとき防空壕に入っていた兵士多数が戦死したが、奥の方にいた古年兵が多く死亡し、入り口付近の初年兵が助かったと炊事の人が話していた。

B 29は毎日昼ごろに一機、二機と来るようになり、鞍山製鉄所空爆だと言った。ある日、サイレンと同時に立山方面の雲の間にB 29が見えたが、轟々たる爆音で話し声も聞こえないほどで、きょうは少し機数が多いぞと思った。味方の高射砲が四方から火を吹き始めた。そのうちにみるみるB 29は頭上に来ていた。雲の切れ目に十三機見えたのである。もう助からないと覚悟してトラックの下に潜っていた。爆弾は右に左に、前にも後ろの方にも落とされて、濛々と土煙が空を暗くしてB 29が見えなくなったが、爆音だけは続いた。私は運よく助かっていた。生きていた。白日の夢のようにドーッとしていた。敵機が去ると同時に、どうしたとか、味方の高射砲の弾丸の破片が甲高い笛の

ような音をさせて無数に落ちてきた。そしてトラックの屋根や荷台や地上にブスブスと穴をあけた。その後はこげ臭さが充満していた。私はしばらくトラックの下より出られなかった。

B 29空爆の状況をつけ加えてみると、爆弾が落下するとき、風を切って気味の悪い音がする。その音が右方向に聞こえれば右方の百メートルくらいのところに土煙が上がり、左方向に聞こえれば左方向に土煙が上がる。ただ頭上で音が聞こえても、右か左か、前後かわからないようなときは、恐らく直撃弾であり、どちらへ逃げてもし助からないと思った。味方から撃たれた高射砲の弾丸の破片を拾ってみたら物すごい刃物になっていた。そして、まだ温もりがあった。B 29は一万二千メートルの高度であり、我が高射砲は一万メートルしか届かないというから、当時の敵の最新鋭機に対し何の役にも立たなかったのだと思った。

敵機が去ってから町へ出てみたら、直径三十メートル、深さ十メートルくらいのとてもない大きな穴があけられていたり、民家が半分吹き飛んでいたり、大

勢の人々でごった返していたのを遠くで見た。ほかの部隊の佐官級の将校が自分の隊へ送ってもらいたいと言ってきたが、送るような状態ではなかった。とても車など走れなかった。安全と思って山の上へ逃げていた婦人、子供たちが爆撃されたり、むしろ危ない場所の街の中の人々が助かっていたり、全く人の運命はわからなく思えた。そして、死傷者が多数出たようだ。

そして空爆が終わると、大群衆が荷物を持って続々と帰ってきて、道路は大変な混雑となった。鞍山空爆もこれが最後で、B 29は奉天方面へ行つたようだ。後日、米軍の報道では鞍山は壊滅したと発表していたと聞いた。後日わかったが、奉天方面でもB 29一機が我が軍によって撃墜されたが、そのときの高射砲は新型の九九式であったと知らされた。撃墜されたB 29の乗務員七名くらいがトラックで輸送されていくのを見た。黒人も二、三名いたし、飛行服は一人か二人しか見えなかった。後で、ある兵隊から、墜落したB 29のエンジン部分からニュームを切り取ってきて、記念に印鑑をつくったことを聞いた。

## 二、大石橋新飛行場建設と終戦玉音放送

昭和二十年三月ごろ、私は六名ばかりで大石橋飛行場建設部隊へ移動した。

この飛行場は、山々の間に建設中であつた。滑走路も未完成であつたし、広い場所の中には民家もあり畑もあつた。自然の風景をそのままにして所在がわからないような飛行場をつくるらしく、格納庫は山を掘つてつくり、空から見えないようにするのだということだつた。何カ所も多くの工事現場や分隊があり、満人も何千人も動員されて、馬車を使用して器材の運搬などをしていた。時折、軍用機も飛来するので、大工事が始まつていた。

私は、この建設部隊の本部輸送班に編入されて、直接荒川隊長指揮下となつた。そして隊長の供をして現場を回つたり、町へ物資の受領に行つたり、經理の将校と豚や油の買い出しをしたり、時々は隊長の会議出席の供をして夜の町の運転台で夜明かしもした。そんな隊長の多忙、苦勞を見て、ご苦勞さまと言つてやりたいと時々思つた。

毎日の多忙な中に昭和二十年夏になつた。

私の車にいつも助手として乗る中年の満人がいた。

私は彼をボーイと呼んでいた。作業や買い出しなどには必ず連れていった。彼がいると何かと都合がよかつたからである。そして時折野菜などを家に持たせてやつた。ボーイは、私の名前を中国流にコーキョウツアンと呼んでいて、かわいかつた。

彼の家へ買い出しの途中ちよつと寄つてみた。民家へ立ち寄ることは禁止されていたが、私は買い出しなどで方々の民家へ出入りしていた。ボーイの家で水飯を出されたが、一杯で謝つた。それはコウリヤン飯が水の中へ入っているもので、とても食べられない。後日、ギョーザをたくさん持つてきてくれたが、臭いので辛いのでだれも食わなかつた。

當口まで油を買い出しに經理の将校と二人で行つたとき、本格的な中国料理が出た。いい気になって初めから食い出したら、出た料理の半分は食い切れず大失敗をした。その中でスープはとてもうまかつた。

昭和二十年八月十五日、私は朝早く、第三分隊の日

浦伍長と二人で、二台のトラックに満人を五人ずつ乗せ、建設資材受領のため部隊を出発し、大平原を砂ぼこりを立てて鞍山市へ向かった。

途中休息のため二、三軒しかない部落へ泊まり、水をもらって飲んでいたら、農民がトラックの上のアンペラを見て、鶏と交換してくれと言った。満人に話したらただで二枚やったようだった。そのとき日浦伍長から、おまえの上等兵進級の通知が来てるから、近いうちに通達されると知らせてくれたが……。この日は、こんな平和な一時の中に私はいたが、そのころ敗戦の玉音放送があったのである。

目的の鞍山市役所に到着と同時に、日本人職員から玉音放送の話があり、私と日浦伍長は日本の敗戦を初めて知ったのだった。一瞬にして目の前が真っ暗になって、到底信ずることはできなかった。何かの間違いではないかと思ったり、とにかく非常事態が発生したと思った。

緊急事態になったので、日浦班長は満人と相談の上解放した。その日は満州は快晴だった。そして直ちに

資材は受領せず、製鉄所の知人の宅へ行った。お互いに話し合ったりしているうちに、ようやく信じられるようになった。

私たち二人は直ちに一路大石橋に向かったが、落ちて着かない不安な気持ちで、前方の班長の車がばかに遅いように思いながら走った。帰隊は遅くなった。もう今までの日本軍隊ではなくなったせいか、虚脱感が隊内にみなぎっていて、皆ウロウロしているだけだった。

### 三、各分隊、街の兵舎へ集合命令

各分隊集合命令が出て、朝から集結作業が始まった。各分隊の輸送班は、木材その他を運び仮兵舎づくりが始まり、大忙しの日が続いた。

そんなある日、私は兵隊を四、五名乗せ移転の作業中に、前方から赤旗を立てたトラックの大部隊が見えた。私は日本軍の移動だと思い、敬礼態勢をとってとまっていたら、何と突然なソ連軍の大自動車部隊であった。満州では、将校の乗ったトラックや乗用車には、将官級は黄色の旗、佐官級は赤色の旗、尉官級は青い旗を立てて走行することになっていた。私はソ連軍の赤

旗と味方の佐官級の赤旗と間違えていたのだった。

そのトラック部隊の中には日本の車もあった。これは途中でソ連軍が乗り換えてきたものである……。トラックの荷台にはソ連軍の兵士が大勢乗っていたし、婦人兵士も見えたのである。そのときは何事もなく、自動車大部隊は砂ぼこりを残して南下して行った。そのときがソ連軍との初対面であった。

後から来た一台の車が穴に落ちて動けないでいた。私たちはみんなで後押しして出してやったら、若いソ連兵がビールを五本ばかり置いて行った。ソ連軍は女性兵もいるし、ビールも持っていたのには驚いた。

ソ連軍の侵攻は早かった。次の日の作業中、小川の土手の上で兵隊を五名ほど乗せて走っていたら、運転台の屋根をバンバンとたたかれ、急停車した。見ると左土手下に一台のソ連軍トラックがとめてあり、兵士が五、六名乗っていて、運転台には婦人もいたが、野営していた様子だった。そして一人の将校らしい人が真つ黒な大きなピストルを持って私の運転台に入ってきた。私の車の荷台の兵たちはバラバラと飛び降りて

川原へ散った。将校はピストルを私の胸に当てて前へ走れと合図しているので、恐る恐る走りだした。街へ入ると今度はハンドルをたたき停車を合図して、私に降りろと言っているようだった。ドンと一発くるかと思つたが、その気配もなく、安心して下車したら、彼は自分で車を運転して行ってしまった。私はトラックを奪われたのである。仕方なくソ連軍の赤旗の車の通る中を歩いて自分の隊へ帰った。

帰隊してすぐ兵器係の少尉殿の部屋へ行つて、このことを報告した。少尉殿は「兵は兵器と運命をとにもするものだ」と一言言っただけであつた。

兵舎に戻ると、秋田出身の能代谷古年兵が一人で、おれも車を取られてしまい、今報告してしまわれてきたところだとションボリしていた。それではもう二台目かと少しは気持ちが軽くなった。

その後その少尉殿も、夜外出中、腰の軍刀を奪われたことを聞いた。武士の魂を敵に取られたのに、なぜ運命をともしなかったのかと陰で悪口も言つてみたが、敗戦の混乱の中で、日本の軍隊精神も通用しなく

なっていたのだった。

#### 四、集合兵舎

ソ連軍より日本部隊の集結命令が出て、仮兵舎が建ち、各分隊は集結した。

私たちが運んできた各種の缶詰やたばこや甘味品類の箱は床下に入れ、その上に板を敷き、アンペラを敷き、少しばかりの荷物を枕にして、仮兵舎の中でソ連軍の支配下になった。そして銃剣等は土を掘って埋めた。将校夫人は頭を丸くして軍服、戦闘帽姿に変装していた。

他部隊も入ってきた満員の兵舎より、ある日、町へ散髪に出かけた。町へ出てみて驚いたことは、今まで見たこともない青天白日旗が、広い道路の両側の民家の入口に、はるかかなたまで街並み全部立てられてあり、全く壮観と言えるものであった。終戦直後なので、他部隊の兵から九九式短小銃を借りて持っていたが、床屋では満人が数人寄ってきて、日本敗戦だとか、中国がどうのこうのと言つてにぎやかだったが、危険もないようであつて、散髪を済ませて帰った。だが、あ

の町じゅう揚げた旗をよくも各戸が持っていたものと感心したものであつた。そして、見事な旗の波、改めて敗戦を強く感じた。

ある朝、暗いうちにボーイに起こされた。泥棒だ、と言っている。早坂上等兵を起こして二人で行つてみると、炊事用の大きなかまを担ぎ、モロコシ畑の中を逃げていく人、一人。もう敗戦日本軍もばかにされたかと腹が立つて、捕らえるときんざん殴つてしまった。ボーイの話だと、麦粉など何袋も取られたと言つた。また、トラックのタイヤも二本取られた。原っぱに自動車は何台も置いてあつたのである。

二三日後、ボーイが一人の農民風の男を連れてきて「馬車をつくるからタイヤ二本売ってくれ」と言うので、使用できない車もあり、日本軍として使用するかどうかもわからない今日なので「持っていけ」と言つたら、二本分で四千円も置いていった。兵隊の給料が当時十二円くらいの私たちには大金だったのである。早坂上等兵と二人で分けたが、後でソ連兵に全部取られてしまったのである。

毎日何もすることがなく、ボーイが持ってくるトウキビを焼いて食ったりしていた。私は、ボーイの親切でよく物事に気がつくような態度に、近ごろどうも怪しいと思えてならなかったが、よく注意していたが彼は正直者であった。夜は帰るが、毎朝ほかの満人とともに出てくるし、怪しいところは見つからなかった。私どもは時々白米をこっそり出して自分たちでたいて食べた。その白米と砂糖を少しばかりボーイに持たしてやったら、彼は飛び上がらんばかりに喜んで、すっかり家で持つていったことがある。彼は自動車の助手の仕事もなくなつて炊事の兵の手助けをしていたが、別れの日が近づいていた。

ある夜、遅くなつて早坂上等兵に起こされた。彼は外に私を連れて行き、こっそりと軍隊を逃亡すると言つたのでびっくりした。ソ連に行けば生死はわからない、というのが理由であつた。彼は満州の現地召集兵で、入隊前は朝鮮、満州を転々と渡り歩いた者で、両国の言葉は達者であつた。彼と街へ遊びに出たり満人や朝鮮人と接するときは大変助かつていた。軍隊では

こういう人たちを満ゴロと呼んだ。原隊でかわいがられた乗本上等兵も満ゴロだったし、まだ若者が大陸で多数いるという。

早坂上等兵は既に決心していた。一応はとめてみたが、だめだった。私は、仲のよかつた彼と別れるのかと、本当に寂しくなつた。私は彼と一緒に作業しているといつも安心していられたし、私より年下だった。だが、彼と別れる時がきた。お互いに手をとつて、彼は何度も礼を言つて夜のやみに消えて行つた。彼の消息はその後全くわからないが、彼のことから大陸のどこかで中国大人となつて立派に暮らしていると思いたいのである。

早坂の予言どおり、我が関東軍の大部隊は、そのころシベリアへ大移動の準備が着々と進められていたのである。

#### 五、武装解除と海城集結

昭和二十年八月末ごろ、武装解除のため広場に集合命令が出た。一切の持ち物を土の上に並べて整列した。近くの仮兵舎から集まつた他部隊の兵とともに、三重

四重に整列した大部隊であった。

私の隊では銃や帯剣は前もって地中に埋めていた。

それは、銃には陛下の菊の紋所が入れてあるため、敵に奪われたとき恐れ多いということであった。ピストルや写真機、地図、書類等は全部出すように指示されたが、我々兵はそんなものは持っていない。金は軍靴の下へ敷き、その上に立っていた。シャツ、ズボン下、たばこなどは取り上げなかった。一応軍服の上から体を調べて終わったが、何と長い時間であった。

終わると直ちにソ連兵の監視のもとに長蛇の大行軍となった。行軍途中でソ連兵が、持っているものを見てポツポツと取っていった。大抵の者は金もたばこも甘味品も取られてしまい、身一つの寂しい敗残兵の大行軍となった。

私たちの大集団は海城に着いた。久しぶりの行軍で疲れた。

各方面から集まった旧関東軍の兵隊は、二階建ての大きな兵舎に満員となった。その日より一日二食となった。そして、毎日粉をもらってきて、あちこちで板

切れを見つけて、その上ですって玄米にして炊事場に出し、調理した食事をもらうのであった。ソ連側からは、日本に帰国編成のためだということだった。

その後、凍傷の薬が一個と寒さに対する注意などがあって、これはソ連領に連行されるなと思った。しかし、そのころはまだソ連に連行されて強制労働させられるとは思わなかったし、幾日も不安定な単なる集団としての生活が続いた。

こんなある日、三人ばかりで海城の町へ出た。食堂ふうの店へ入り雑談していたら、朝鮮人の女の子が来て「ターピーズ来る、二階へ上がれ」と言う。ターピーズとは鼻高男、つまりソ連兵だった。二階へ上がって下をのぞき見していたら、自動小銃を前にぶら下げたソ連兵が四、五人、家の中を珍しそうに見回していたが、出て行つた。そして下へ下りたら、女の子たちが集まってきて、「兵隊さんたちも朝鮮の私たちの村へ行こうよ、私たちも恐ろしくなって帰国するのだ」と言った。

私どもには、そこまでの行動は決心できなかったし

銃も剣もない丸腰で、面倒にならないうちにと店を出たし、彼女たちの気持ちもわからなくはない。そのころ、朝鮮まで行けばどこかの港から日本行きの密航船も出るという話もあった。ただし、かなりの金が必要だった。

ソ連兵が倉庫からしょうゆ瓶を何本か下げていくのを見たが、恐らくブドウ酒と間違えたものと思った。

## 六、日本兵輸送貨物列車

そして九月初めころになって部隊の出発が始まった。幾つかの部隊を見送っていたら、ついに我々にも出発集合命令が出た。

駅までの行進で、ただ人々の後を歩いていった。駅には黒々とした長い貨物列車が待っていた。貨車を指定されて二十名くらいで乗り込んだ。中の奥は二段とになっていた。間もなくドアが閉められたが、十五センチくらい開けてあり、そこから大小便ができるようになっていた。逃亡防止のためだと説明された。

出発前に広場で私どもの部隊の将校から、日本に帰るには三方所のルートがある。大連と釜山、そしてナ

ホトカだと言つて、どちらの方向に列車が走り出しても心配するなど言っていたのである。

私どもの貨物列車は走り出してどんどん北上していたが、やがて奉天あたりから止まったり走ったりが多くなり、時間的な走行から全く外れていた。夜も昼もこんな運行状態で、列車は走り続けていた。

幾日か列車は走り続けて、興安嶺を越えるころ外を見たら、驚いたことには、同じような長い貨物列車が黒煙を上げて前方に見えたり、後ろを見たら後方にも同じような列車が我々の後を追っているのである。私たちはこのころになって、ようやくソ連へ連行の列車輸送とわかった。この付近はカーブが多いところなので、一本のレールの上に三本の長い貨物列車が走っていた。そして前後の列車に兵たちの手を振る姿がよく見えた。延々たる大輸送の光景は、映画でもちよっと見られないだろうとびっくりした。

ソ連では、これほど日本兵の輸送を急いでいたのであった。

いつも貨車入口の便所のところから寒い風が入った

り臭かったりでまいったし、そこから大切な食事も入ってくるのだった。

一晩じゅう止まっていたので、人に聞いたら「満州とシベリアでは線路の幅員が違うので直しているのだ」と言ったが、そんなことではなく、先々の列車がつかえていたのであった。

そしてまた幾日か走り続けたある夜、列車が停車していたとき、だれかが外で「列車が線路を間違えていたからしばらく止まる」と言った。大分北部にきたのか、車内は寒くなっていた。それからしばらくすると、前の方から全員下車するようにと声が聞こえてきたと思っていたら、いきなりドアが開けられた。約一カ月くらいだったと思うが、外を見ると夜目にも寒々とした真っ白な大雪原の中であつた。そして、そこはシベリアの大地であつた。

外へ降りたら、雪の中で寒く、軍靴では立ってられないで足ぶみをしていた。十月初めのころだと思ふ。後で聞いたら、ここはシベリア東部のチタ地区のヤブロノバヤという町だとわかつた。そして私たちはここ

の収容所（ラーゲル）へ入った。その日は何月何日だか、長い貨車の旅であつたし、教えてくれる人もなく、全然わからなくなっていた。

#### 七、強制労働

私たちは完全に捕虜になった。一貨物列車全員だから約千名くらいはいたと思うが、何カ所かのラーゲルへ分散しようだった。

ラーゲルは丸太を組んでつくった三角兵舎であり、真ん中に通路があつて、両側には人間が寝られるだけの幅の細い丸太が並べてあり、その上にはツツジの枝のような細い枝が敷き詰められていた。そして一部二段になっていた。そして、入り口より四十センチの幅の寸法の割り当てで、防寒外套着のままゴロ寝であつた。まきストーブが通路に二つあつた。どのくらいの日本兵や民間人が抑留されたか、何の目的か、私どもにはわからなかつたし、また何も考える余裕などなかつた。

夕食が出た。ロシアの黒パン一切れ（五センチ幅の長さ十センチくらい）、それに昆布汁（飯ごうに半分）

と生干しニシン一匹で、これは焼くと塩気が出るから焼いてはいけないと言われた。

夕食が終わったころ、我が軍将校から、明日から早速山に入って伐採作業のため出動すると言ひ渡された。

今まで何かとだましながら、ここに来て捕虜として強制労働を指示してきたのである。ソ連兵士が自動小銃を肩にかけて二三人見守っている中であつた。だれも木を切ったことはないと言つていたが、そんなことは通じるものでもなく、二人一組で作業をするから今から組を決めておけと言われた。そして一組ごとにノコギリとオノ一丁が渡された。ノコギリは一メートルもある長いもので、両端に手で握るところがあり、二人向かい合つて押したり引いたりして切れと言われ、オノは枝を払つて燃すためだと言う。

ここには下士官以下百五十人はいたようだ。満州で冬に着用した防寒具一式が支給された。ずっと後でまた綿入れの満服上下が支給されたが、抑留中はほとんどがこれで通した。

シベリア最初の夜は、だれも一言も話さず、汽車の

疲れなどで肩をくつつけて寝た。朝になって起こされたが、まだ暗かつた。だが、時間は八時ころだと言う。シベリアでは、朝明るくなるのは九時ころで、夕方暗くなるのは三時ころだと言う。

朝の食事は黒パン一切れと昆布汁。昼食は、麦かコウリヤンかアワなどの穀物をかたく煮て油と塩で味つけしたもので、これをカーシヤといった。夜もカーシヤと生干しニシン一匹と昆布汁だった。

初めてシベリアの樹林に入った。雪が十センチくらい積もっている針葉樹の多い原生林であつた。ソ連兵の指示で立木の根元の雪をのけて、地上から十センチくらいのところから切れと言う。これは後で運搬のトラックが入れるようにするためだ、と言つた。

松や落葉松、白樺の木が多かつた。木を倒したら枝を払つて、長さ二メートルのところを輪切り、この丸太を高さ一メートル十センチ、長さ四メートルに積み上げて、これが二人一日のノルマだと説明された。だが、初日はどの組も完成したものはない。二日目も雪の中で木を切つたが、夕方までには半分くらいし

かできなかった。そして毎日ノルマはできなかった。

ある日、やっと倒した松の横で一息入れていたら、ソ連兵が回ってきてブイストラ、ブイストラ（早くしろ）と言いながら、銃で私たち二人は外套の上から殴られた。あちこちでもそうだった。ノルマを達成する組はなく、毎日遅くなるので、彼らは怒っていたのである。氷点下の雪中で、多くの日本兵はなれない伐採を昨日もきょうも、いつ終わるともしれないノルマに向かつて厳寒と空腹を耐えて苦しんだ。私と組をつくった兵は、秋田出身で、若い元気な若者で助かった。私たちはこんなとき、達成できないノルマをごまかすことを教えられた。それは、前日に積んだ丸太の木口にソ連兵がたき火の炭で検査した印を十カ所くらいつけてある。これを見つからないように大急ぎで切り落とし積み直して、夕方まで待つて検査を受ける方法だった。一回か二回はうまくごまかしたが、ついにほかの組で発覚して、監視の兵に殴られたりして大騒ぎとなり、だれもできなくなった。仕事は苦し過ぎた。そして寒かった。

我々は大半の人が朝食と昼食を朝一度に食ってしまったようになった。食事が足りない。だから毎日昼食は食うものがないのである。そんなとき、飯ごうにカーシヤを詰めて腰にさげ伐採作業に向かう途中、歩きながらだれかに取られ、泣き顔の兵がいたこともあった。そして空になった飯ごうは雪の中へ投げてわからなくなってしまう。

飯ごうがないと一人ごとの食事が分けられない。それで食事分配のとき一つの飯ごうに二人分もらってきて、これを今度は二人で分けて食うのだが、平均に分けるのはとても難しい。そこで木の棒でてんびんをつくり、両端に飯ごうを下げて少しずつ入れて平らになったとき、初めて分けたことになる。昆布汁もこうして分けるのだった。しかし、この方法は間違っていることにだれかが気づいた。それは、飯ごうには鉄製もニューム製もあり、形も違うものがあり、今までの分配方法では中身は同じ量にはならないと言う。空のうちにてんびんにかけて印をつけておくようにしておいて、だれでも簡単には分けられないようにした。

そして、飯ごう紛失事件が時々起こった。私たちは何よりも飯ごうを大事にし、夜や作業に出るときは必ずひもで縛っておいた。私も最初のころ飯ごうをだれかに夜中に取られて困ったが、幸いある兵から中ごうを分けてもらって、命拾いしたような気がしたことがあった。

ある日、氷点下三〇度も下がったときに、毎日ノルマが達成できないということで、暗くなっても帰れないときがあった。シベリアの冬は午後三時ごろにはもう暗くなる。暗くなれば伐採などできないが、いつになつても帰れる合図がなかった。その中にたき火がちらりと見えるのはソ連兵であり、我々は丸太に腰かけて震えていた。寒さは急激に襲ってきて、立ったり腰かけたり体を動かすより仕方がなかった。どうして我々日本兵がこんな目に遭わなければならないのか、暗い夜の林で泣いた。そして夜の九時ころになり、ソ連の隊長が来たらしく、帰れの声が聞こえてホッとした。

凍傷患者が続出し出した。足がはれて防寒靴が履け

ない者、手袋に指がよく入らない者、鼻の頭が赤くはれている者たちがいたが、作業には出されていた。そのうちに寒さと栄養失調で衰弱し死亡する者が出始めた。もう夕食にニシンは出なかった。

私と一緒に寝ていて食事も分け合っていた大阪出身の若者が、朝起こしても起きなかった。死んでいた！肩をくつつけて寝ていたのに、全く死には気がつかなかった。彼は一言も言わずに死んでいったのである。

その朝も死んだ彼の横で食事をして作業に出なければならなかった。私の寝台の上に寝ていた兵も一人死んだ。地獄とはこんなことを言うのだろうか……。そして、明日は我が身だろうか、何とも言えない気持ちにならざるを得なかった。暖かい地方の出身者が大半凍傷になったり、体力のない兵がボツボツと死んでいった。

食料受領の馬車が収容所に夜帰ってくるので、その後を歩くと馬鈴薯が落ちていることがある。カンカンに凍っているが、少しは拾えることを知った。あるとき何個か拾ってきて、夜、飯ごうに入れて煮た。ちょ

うどいいころと思つて中を見たら、数が足りないようなので、よく見たら、満馬のくそが半分溶けていた。夜だから満馬のくそも馬鈴薯もカンカンに凍つていてわからなかった。そのころは、少しでも、また何でも食わないと死んでしまうのではないかと思ひ続けた。私たちは飢餓食欲の世界に入れられていた。そして極寒のシベリア原野には、捕らえて食う小動物一匹も見ることができなかった。

#### 八、死者の火葬

三十センチも雪の積もった寒い朝だった。ソ連兵に呼ばれて使役を命ぜられた。四人の仲間であつたが、何と死者の火葬当番であつて、嫌な使役であつた。髪の毛一本見えないほど白い包帯で全身を巻いてある六人の遺体であつた。

雪をのけて丸太を何本も運び、林の下の雪をのけて地上に井桁に組んで二人の遺体を載せて、またその上に丸太の井桁を組み重ね、二体を積む。また丸太を重ねて六体を載せた。二人で一人の遺体の頭と足を持つても体は少しも曲がらないで、凍っているのか、丸太

を持つたような感じだったのである。そして一番下から白樺の皮や小枝を集めて火をたいが、丸太にはなかなか火が燃えず、何回もやり直した。

四人は終始無言で努力した。そして煙が上がり丸太が燃え出して中は見えなくなり、少し離れて見守っていた。嫌なにおいがして火の手が上がったころ、ソ連兵が別の仲間四人を連れてきて交代させられた。後のことはどうなつたかわからない。そして遺骨はどうしたかわからない……。

ただ日本人であつたことは間違いない！ 今になつて考えれば、そのとき六遺体の官姓名を聞き、遺骨の一部でも持ち帰れたならどんなによかつたことかしれないが……。だが、当時はそれどころではない。自分がそうなつていても不思議ではない状態であつて、生と死との境にいる魂の抜けた人間の集団であつて、正常ではなかつた。

そして、ソ連内に日本人墓地が方々にあると聞くが、死者の全部の墓石があるとは信じられない。広い原野の丘に一人寂しく、詣でる人もなく眠っている人もあ

る。ソ連国じゅうに八百五十カ所もあったと言われる各ラーゲルに、多かれ少なかれこのようなことはあつたに違いないのである。私どものラーゲルはチタ二十四地区と言うようだった。そして二十四地区内にも同じようなラーゲルはたくさん存在していたし、山小屋程度のところは数知れないようだった。

#### 九、ソ連兵の点呼とラーゲル生活

毎朝点呼を受けるが、ソ連兵の中には、二十人以上になると完全に人数を掌握できない兵もいた。そして、手の指を折りながら数を確かめていたので、なかなか手間がかかった。なぜソ連兵はこんなに程度が低いのだろうかと前から気にかかっていた。捕虜の監視くらいだからだれでもよかったのかもしれない。

そのうちに、だれかがソ連軍隊の兵隊教育のことを聞いてきた。この地方では、召集した若者を山小屋に合宿させて伐採をさせながら、頭のいい者は高等教育に回し幹部や重要部門の教育をして適当な仕事をさせ、最低が兵だということだった。ソ連には文盲が多いということを聞いていたが、本当のことだと思つた。

そのころには私もまたみんなも体力がなくなつてた。体重が減つてきてとても体が重い。六十キロくらいあつたころもあつたが、四十キロ台に落ちていた。足のふくらはぎがなくなり、足首から膝まで真つすぐな棒のようにやせていた。それでも毎日の作業は休みなしであつた。時には氷点下五〇度、又は悪天候のときなど、作業を休むこともあつた。

日本の軍服など、もうそもそもなくなりチョッキになつていたし、代わりに支給された満服は破れて綿が出る。毎日のように針仕事がある。糸は綿から自分でつくるが、糸なんてものではない。細いところも太いところもあり、よく引つかかる。針は支給されたが、あるとき、穴のところから折れてしまった。困つていたら、隣の兵から針の修理方法を習つた。太い毛糸針のようであつた。かたい石の上で頭部を平らにつぶして、目立てやすりの折れてとがつた先でコツコツと穴をあけた。少し大きくなつたが、それでも針仕事はできた。満服は継ぎはぎだらけでヒラヒラするところもあつたが、何しろハサミがないので仕方がない。

私たちの便所は、大きなラーゲルでは、少し離れたところに三メートルに五メートルくらいの面積で大きな穴が掘ってあった。その上に丸太を渡し、すき間をつくってある。屋根も囲いもなく、二十人くらいは一度に用を足せるが、紙はないから満服のボロを使う。食うものが少ないから毎日はいないし、寒いから臭くもない。前の人のしりを見ながら用を足す風景は、シベリア抑留者ならでは見ることはできないものである。小さなラーゲルでは夏も冬も原野で済みます。雪の中でおしりは凍傷にはならなかったが、痔になって苦しむ者もいたようだった。あるときシラミをとって雪の中へ落としたら、すぐ真っ白になった。兵みんながシラミを持っていて悩んだ。

#### 十、技術者募集

雪の静かに降る夜、日本の将校が来て技術者の調査が行われた。私どもは関東軍各部隊からの寄せ集まりであり、たびたびラーゲルを移動させられている捕虜であるから、だれが何ができるか一切わからない。年も出身地も家族のことも何も言わない集団であって、

ただそこに捕虜になった兵隊がいるだけのことで、七、八十名はいたのだが……。

そして大工や左官から鉄工や事務屋、自動車の運転手ら、聞いてもだれも声を出す者はいなかったし、中には何か仕事のできる人がいたはずであった。私も黙っていた。だれもが余計な仕事をするのは嫌な気持ちと、みんながもう元氣も氣力もなくなっていたからである。これに応募すると食事はソ連兵並みだと言うが、一方ダモイ（帰国）がおくれるという心配もあったと思う。

私たちが毎日切り出す木材はどこへ行くのか。聞くところによると大半は毛皮と交換されるとのうわさもあった。毛皮がなくてはソ連には住めない。その他発電所などへも送られると言う。羊の毛を圧縮してつくった靴でカートンキューというものがある。羊長靴で軽くてとても暖かいが、水のあるところではすぐしみ込んでだめだった。ソ連兵はほとんどこれを使用していた。

ある日、ほかのラーゲルから二十何人かの兵が移動

してきて仲間になった。聞いてみたら恐ろしい話をしていた。熱病が流行して大半の者がやられ、木格子の中へ入れられ幽霊のようにうめき通していて、にぎり飯を入口に置いて食べる者はいなかったという。そして次々に死亡してしまい、ついにラーゲルは閉鎖し、死体ともども焼却処分してきたという。私どものところではそういう病気は発生していないので助かったと思つた。そして、そこには百名に近い遺骨が残されていると思う。

あるとき、こんなうれしいことがあつた。雪が四十センチも積もつた日だつた。ソ連兵二人と我々六、七名が林の上の方へ案内された。そこには小さいが二階建ての小屋があつた。水を汲んでこいと言うので、二人して近くの雪の中の小さな川から水を運んだ。夜は寒くて二階で丸くなって寝ていた。朝になって驚いたことは、たくさんのごちそうが階下に準備されていたのである。白米こそなかったが、肉も魚も野菜もあるし、昆布汁ではなく、ロシアふうのスープが湯気を立てていた。また、カルトーシカ（馬鈴薯）も甘味品も

あつた。何だか薄気味が悪かつたが、ソ連兵と一緒に夢中で食つたのである。そして元気になつて外へ飛び出して、久しぶりに体操をし笑つたのである。どうしたのかと不思議でならなかつたが、みんな話し合つたところ、どうやらクリスマスか元旦ではないかということになつた。だが、今日が何月何日なのかわからなかつた。

夕方には下山してラーゲルへ戻つたが、どうして私たちだけ小人数にこんなことをしてくれたのか、いまだにわからない。このことが元旦とすると、昭和二十一年になつてゐることになる。そのころになつて、どうしたことかソ連兵も大分穏やかになつて、ノルマができなくとも余りやかましく言わなくなつていた。これも我々にはさっぱりわけのわからない不思議さであつた。

ソ連では馬を大切にする。首から顔、そして四本の足にも真っ白い包帯を巻いてやる。しかし満馬にはしない。これは寒さに強いからだと思われる。そして馬の肉は食わないという。あるとき、馬の死んだのを埋

めてあるのを見つけて、みんなで掘り出して食う話が出たが、実行されなかった。

山で時々枝燃し作業がある。そのときいつも出るのがぼたもちの話であった。もち米をふかし、つぶしてあんこをつければぼたもち、きな粉をつければきな粉ぼたもちと言ったら、それは違うと言う。もちをつきあんこをつけたものとか、大福のようなものとか、粉からつくるとか、まあいろいろの品種があったのである、日本全国のぼたもち話であった。そのときはみんなの心はぼたもちになっていた。

また、たき火をするとき、煙のなびく方には日本では煙いのでだれも行かないが、シベリアではその方に自然に集まる。それは、煙の中は体全体が暖かくなるが、反対の方向は、火に向かってゐる方は暖かいが後ろ側は痛いほど寒いからである。これは私も実感してきた。そして我々は火を燃すのに火打ち石をつくって持っている。これにはソ連兵も驚いていた。だが、これはマッチのようにすぐは火にはならない。

私どもは常にラーゲルを移動させられる。林を求め

て集合したり分散したりして、伐採の相手も変わるが、互いに出身地や家族のことは話に出てこない。ただ毎日、松の木や白樺の木を切るだけが続いた。

#### 十一、軍医の診断

シベリアの厳冬も去り雪も消えていったが、寒さでは春とは言えないころ、軍医の健康診断があった。女性の軍医であった。いかめしい軍服姿で堂々とした体格である。余り多くの日本兵が死亡するのでソ連当局も心配したのではないか。

上半身裸になり、いすへ腰をかけると、腹の皮をつまんだり引っ張ったりを繰り返し、そして背中の方も同じようにして診断は終わった。診断はそれだけであった。そして「ドヴァー」と言った。診断は一がアジン、二がドヴァー、三がトリリーと言った。そしてドヴァーは軽作業であった。ドヴァーに体力が落ちると、ノルマも減らされるが食事も減らされるという。

二、三日後、私は貨車に丸太を積み込む隊へ移動した。十四、五人だったと思う。丘の上から線路の見えるラーゲルへ着いた。そこには七、八十のドヴァーの

先輩がいた。線路の付近には我々が切った丸太の山が積んであった。ホームもないただ原っぱの線路ばかりのところへ貨物列車が止まると、直ちに出勤して積み込む。列車は大体一日一回くらいしか入ってこないが、時間が決まっていないので朝早いときもあった。貨車は全部有蓋車で五十トン、三十五トン、十五トン車の三種類で、五十トン車には奥の方に明かり取り窓が左右についてあった。そして長さが十メートルもあり屋敷のように広かった。

貨車が到着すると、直ちに集合して丘の上からおりていく。六人、四人、二人と、貨車の大きさによって持ち場が指示された。積み込みが始まると、ソ連兵が来てベストラが始まる。早く終わった組はほかの組のところを手伝う。日本人は担げるものは全部肩に担ぐが、ソ連兵はたまたま手伝っても横抱きにして担がない。余りうるさい監視の兵がいたときに、しゃくにさわって一段積まずにごまかしたこともある。予定の貨車の積み込みが終わると次の貨車の入るまで休んでいた。

このラーゲルの中に、みんなが積み込みに行くとき元氣を出すようにと歌をつくった人がいた。

エンヤコラサノ　ワゴン（貨車）だ

グリーチ（積込）だ　元氣で行こうぜ

弱いお方は無理するな

ガンバレ　ガンバレ　明日の日本を

背負うこの力だ　ホーイ

しかし、大きな声で歌う者はごく少なかった。元氣がなくなつて声が出ないのであった。

シベリアには春と夏が一度に来る。春が来ると林の方にツツジの花が咲き始めた。これを飯ごうの中へいっぱい詰めて帰り、煮て食った。甘くてうまいが、煮ると半分になった。あるとき山火事が発生し、濛々とした黒煙と赤い火柱が天高く立ち上がった。そのとき私たちの大切なツツジの花も燃えていった。私たちに伐採する林など燃えてもよかったが、ツツジの花が燃えたのには困った。

十二、水道工事とソ連婦人

仕事が変わって水道工事に二十人くらいで行った。

ただ土を掘るだけであつたが、土はまだかたく凍つていたところもあつた。

今はノルマもなく気分的に楽になつたところのある日、防寒外套から真綿を取り出して、丸めて持つてカルトーシカ（馬鈴薯）と交換するため二人して出かけた。休みの日である。門のある大きな庭もある家だつた。中へ五、六歩入ると、中から突然大きな大人ほどもある犬が飛び出してきた。仲間の一人は家の方へ逃げ、私は門の方へ逃げたが外套に食いつかれた。破れるとまた食いつき、最後には外套とカートンキューの間の満服と肉まで食いつき、二、三步後ろへ引き戻された。ようやく女の人の声で犬は離れたが、血の出るヒリヒリする足で帰り医務室へ行つた。衛生兵には貨車から降りようとしてけがしたと言つたら、これは貨車の傷ではないと言われたが処置してくれた。私のこの傷跡は四十年後の今でも消えない。このときは完全に失敗した。

また樹林に戻つたころ、五月一日のメーデーにぶつかった。私たちは小さな山小屋であつたので五十人く

らいであり、ソ連兵とともに赤旗を先頭にして労働歌を歌つて、ほこりの立つ田舎道を行進した。

終わつてから、夕方久しぶりにロシアふうのスープとパンがたくさん出た。そして食つた。ソ連兵はウォッカのいいにおいをさせていた。そこで初めてシャワーを浴びた。そのシャワー室は、三坪くらい的小屋の中の片側に石を積み、真ん中に大きなかまがあつた。火は外で燃やし、湯が沸くとこれを石にかける。すると部屋は蒸気で薄暗くなつた。やがて全身から汗がダラダラと出た。そして熱くなると体に水をかけて飛び出す。その間に別室では衣類の熱気消毒をする。狭いところだが鉄板の上に衣類を下げて、下から火を燃すとシラミが鉄板の上へ落ちてきてブスンブスンと音がして、シラミ退治であつた。冬の間はこういうことはできないので、全員がシラミを持っていた。そして一年近く過ぎた後のシャワーは本当に気持ちがよくて、捕虜を忘れるようだった。

また、作業の暇を見て、前の被害にも懲りず今度は一人で真綿を持つて民家へ出かけた。今度は犬に注意

しながら一軒の家へ入った。すると中から背の高い女の人が出てきたので、真綿を見せて「カルトーシカ」と言ったらすぐにわかってくれて、親切に十個ほどと煮たものを皿にのせて持ってきてくれた。そして「クーシャチ（食べろ）」と言ひ、さらに「サヂイス」と言つていすを指さした。私はうれしくなつて塩氣のする馬鈴薯を食べた。女の人はそれを見ながらこう言つた。「東京（故郷のこと）マーリンケ、スコリーコ」と、そして「マダムイエース」とも言うのでハツとした。それは故郷に子供は何人いるかと、また妻はいるのかと言つたのである。私は一瞬びっくりして女の人の顔を見直した。四十歳くらいと思うが、栗毛色の髪の毛も顔立ちも優しさにあふれていて女神に見えた。そして「マーリンケ、チェティリー」と答えると、「フフン」と軽くうなずいていた。それは、家には子供は四人いると言つたのだ。

その部屋は机といすだけの土間であつたが、温かい風がフワリと吹いてきたように感じて、暗いシベリア抑留中でとても忘れることのできない一時であり、う

れしさでボーッとしていた。「スパシーボ（ありがとう）」と何回も頭を下げて礼を言つて外へ出たが、馬鈴薯は重く、足は軽くて大地についてないようだった。そして帰り際にまた真綿を持つてくるように言われたが、もう品物はなく、本当に残念ながら二度と訪れることはできなかった。

日本兵の中には器用な人々がいた。自動車のスプリングを切つてノミやカンナを作り、それでいすを作つた。そうしたらソ連兵たちから大好評になつて、毎日いす作りが忙しくなり、黒パンなど食い切れないようだと言つていたが、だれにも一切れも分けてはくれなかつたようだ。また、ある兵は三味線をつくつた。器用だな、と感心して見たら、胴には外套の中に入っている日本紙を出して張つてあつた。三味線をストープのところであめながら弾くといひ音がして、日本にいるような気分だった。芸能界出身の兵らしく歌も上手だったが、これは一晩だけで禁止された。

あるとき、小さな川のそばで六人ばかりで飯ごうで食事をしていたら、近所から長いスカートをはいた婦

人が四人出てきて珍しそうに我々を見ていたので、飯ごうの中を見せた。そうしたらどうやら木の枝を折ってつくったはしが珍しいようだったので、一人の婦人の指の間に入れてやったが、もちろんカーシャはつかめないで、互いに顔を見合せて笑った。

朝、ソ連兵に呼ばれて二人で民家の掃除に行った。無人の平屋で、だれかが引越して来るようだった。

ゆっくりと一日かかって掃除していた。夕方、終わったころソ連兵が来て、二人にカルトーシカをくれた。帰ってきて、夜二人はラーゲルの中で煮て食ったところ、夜中になってから吐き気がしてきたり、目が回り出し、苦しくなつて一晩じゅう寝なかった。馬鈴薯の芽をよくとらずに生煮えのうちに食ったのが悪かったようだ。それから気をつけた。また、みんなにも注意した。

私もスプーンをつくることを習った。アルミくずを見つけてきて、これを鉄板を曲げた中へ入れて下から火を燃して溶かすと、砂を掘り固めた型の中へ流し込む。冷えたころ取り出して、やすりや砂で磨き上げる。

作業帰りに林の中に馬鈴薯畑を見つけた。二人で相談し、夜になって芋泥棒に出かけた。茎を傷めず、下を掘って芋だけ取り出す。葉は二、三日は枯れないようだ。うまくいった。ところが、別の畑ではかの兵が泥棒中に見つかった。遠くから自動小銃でソ連兵に撃たれて足首をけがをしてしまって、それから泥棒はできなくなった。

今度は作業の帰りにたばこの葉を盗んできた。広い畑であった。私はたばこの葉とは知らなかったが、人から教えられて何枚か持ち帰った。そして小屋の中につるして乾燥させて楽しみにしていた。ところが二、三日して作業から帰ってきたら、乾燥中の葉が仲間によつてまた泥棒されてしまった。

### 十三、毒キノコとハチの巣

さんざ悪いことをしたせいか、また林の中へ戻った。五、六十人の収容所であったが、別の部隊であり、我々は十名くらいで仲間になった。そしてまた伐採の相手も変わるが、今度は同県人の東蒲原郡三川村出身の清野君と相棒になった。そして話が合うようになった。

そして八月末か九月初めごろと思つたが、山へキノコが始めていた。そのころはノルマはどうでもいいようだった。作業の伐採もしなければならぬが、キノコとりも忙しかった。そして夕方はキノコを煮るのにも忙しかった。キノコの種類は色とりどりであつたが、中には毒キノコがあつた。珍しいキノコがたくさん出ていた。大阪で警官をしていた兵が食い過ぎて腹痛を起こし、一晩じゅう寝なかつたようだ。ほかにも毒キノコを食べて苦しんだ者が何人もいた。私も同様、毒キノコを食つたようで、一晩じゅう頭が狂つたように、明かり取り窓がくると回つて寝られなかつた。しかしだれも中毒死した者はいなかつた。

林がだんだん遠くなつていった。ある日、倒した木の下にハチの巣があつた。木が倒れると同時にウワーンという音、そして数十匹のハチに刺されて私たち二人は倒れた。相手は清野君ではなかつた。頭がカーツと熱くなり、目が見えなくなるほどはれてきた。だれもそばには来てくれなかつた。ハチがブンブン飛んでいたのである。しばらく顔を土につけていたらソ連

兵が来た。そして二人を連れてラーゲルへ帰り、薬を塗つてくれたが、吐き気もするし頭はズキンズキンするし、目もよくあけられず食事でもできず、三日くらい寝込んだ。ようやく起きられるようになったときソ連兵が来て顔を見ていたが、何か言いながら出ていった。まだ顔がはれていて、二人顔を見合せて互いに笑おうとしたが、笑顔にならなかつたようだ。

私たちの作業監視には珍しく、ある日婦人将校が馬に乗つて来た。丘の道を馬上姿で登つて行く風景は全く別の気分だった。その後を歩いて行つたら、右側の林の前に小さな小屋があつて、中には何もなく丸見えであつた。その小屋の前で一人の蒙古人の女が堂々と用便中であつた。そしてそれを見ながら通つた婦人将校も我々も、一言も何も言わずに歩いた。ただ、ノコギリとオノが重く感じただけであつた。しかし、蒙古の彼女たちはいつもそれが習慣なのであろうか……。

#### 十四、清野君の死

シベリアでは秋も冬も一度に來た。夏の間は小さな山小屋へ転々としたが、寒くなると大きなラーゲルへ

集結する。そして伐採する林もだんだん遠くなった。そして一時別れて作業していた清野君とまた一緒になった。

雪の二十センチくらい積もった日、暗いうちにラーゲルを出て林へ歩いて行つた。そして落葉松二、三本倒したところ、また一本の木を間にして清野君と雪の中に腰を落として切っていたら、隣の方から「倒すぞ」と声がかかった。倒すときは互いに声をかけ合うことになっていた。声のする方を見たら相当離れてはいるし、細い木であつたので二人とも手を休めて見ていた。すると向こうの樹は半回転してこちらへ倒れてきた。そしてその樹の先端が私たちの二人の間の木の先端に当たり、バラバラと雪と小枝を落として倒れた。逃げる暇もなく、体も動かず、雪煙がおさまるまで頭を下げていた。

雪煙がおさまって見ると、清野君は頭を上げなかつた。「大丈夫か」と急いでそばへ行つて声をかけたら、肩と膝へ当たつたが大丈夫だと言つていたので安心した。私は小枝と雪がかかった程度だつた。ソ連兵が見

たらしく、すぐに歩いて来た。そして清野君の顔を見ていたが、やがて「ラーゲルへ帰れ」と言つて、彼は一人で雪の中を歩いて帰つて行つたが、実は私にとつて清野君の姿は最後の別れであつたのである。

二、三日後になつて衛生兵に会つて清野君のことを聞いたら、病院へ行つて死亡したと言う。私は事故のときよりこのときの方ががっくりきた。本当に寂しくなつた。シベリアでは、同県人といえば親子、親戚、兄弟みtainな親近感があつたからである。あのとき、もし私の方へ倒れて来たら私が死んでいたのかもしれないと思うと寒気がした。そして清野君を失つた後は、心底から話の合う人はいなかつた。そしてまた組が変わつてた。伐採作業では強い人と弱い人はなかなか組まないのである。お互いに難儀するからである。

私は昭和二十三年夏帰国し、間もなく清野君の父親と遺児の房夫君という二人の来訪を受けたが、当時の状況をこまごまと話してあげた。お父さんみただの死亡通知だけでは納得できないので、よく聞かせていただいてあげたいと言つて涙ぐんでいたのがとてもつ

らかった。

なお、このことは私にも責任があるような気もしたりして全く後味が悪い。何年かして清野君の家へ墓参りに行ってきた。そして一夜泊まって、また家族の人々にもいろんなことともに事故状況の話で夜は更けた。遺児の房夫君も今は大人となって、毎年年賀状をよくしてくれる。

シベリアでは体力が落ちると少しのけがでも死亡することが多い。そして数日後というのが多いのは医療設備が悪過ぎるからであり、日本兵なぞ虫けら同様に見ていたに違いない。我々の入ソと相前後して、関東軍の施設からあらゆる物資器材をソ連国内へピストン輸送されたと聞く。結局、我々は生活物資を背負ってソ連に労働したことになる。我々日本人を死に追いやる理由は全くないと言わざるを得ない。

#### 十五、昭和二十二年

毎日毎日、伐採が続いた。シベリアでは積雪は多くは積もらず、三十センチ前後くらいだが、粉雪ばかりで吹けば飛ぶようだ。日本に帰ったころ「異国の丘」

という歌が流行したが、つくった人もシベリア抑留者であつたと思う。昨日もきょうも異国の林の伐採作業は長かった。そして、また雪は消えていったが、まだ嵐の中だと言いたいそのころであつた。

私のラーゲルは作業成績はよい方だと聞いた。ラーゲルも奥の方へと移動していった。今度の場所にはツツジの花が余り見えない。だが、少し急な山肌の斜面につる芋があつた。小指くらいの太さであつたが、掘っていくと二メートルくらい続いた。その太いところだけ折ってきて、煮て食うのが流行してきた。家の方にもある自然薯だつた。どちらが仕事かわからないようにみんなが探していたが、塩が欲しかった。しかしたくさんはとれないのが残念だつた。スツカンボーがあつた。これは酸っぱいがうまい味だつた。

たばこが欲しかった。ソ連将校から一本もらつたことがあるが、吸い口が五センチもある。これは冬手袋をしていても吸えるように長くしてあるという。とてもうまい味であつた。そして将校がたばこを吸っていると、何人かで集まってきて、これを捨てるころ、も

らって何人かで回し飲みをするのである。捕虜は情けなかった。

シベリアの夏の日はいくつにもあきれるようだった。

午前三時ころには太陽が出る。暗くなるのが夜十一時だという。ある日、注意して見ていたら、太陽が沈んだところから右側の少し離れたところより太陽が出るのであった。これには驚いたが本当だった。そして夜でも真つ暗にはならない。これが白夜ということだった。そして夕食後、半日もあるよう何だか狂ったようであった。遠くの林の上へ太陽が沈むのが美しく見えた。

ある日、近くに民家らしいのが何軒かあって、寄ってみようと三人ばかりで行ってみた。丸太を四角に組んだ高い家で、階段を上って入口があった。中は真つ白に塗ってあり、窓も明るくてきちんとしていて、下は牛舎だという。天井裏は穀物類の倉庫で、何でもあるという。真ん中にベチカがあつて、火が燃えているらしく暖かい。夏でも朝や夜は燃やすという。奥の部屋は見せなかった。家は個人のものでなく、官舎で

無料という。

婦人たちは毎日交代で各戸の牛を集めて放牧に行く。馬に乗った一人が先頭で、中に牛が二十頭もいた。そして、後の方へ一人の婦人が馬に乗って追って行く。犬も一匹走っていった。夕方、牛が戻ってくると各戸の婦人たちが迎えに来て、自分の牛を連れて帰った。婦人たちは体格がよい。私がそばへ行くと、顔がオッパイのところくらいの人が多かった。何より元気がよくて、にぎやかでうらやましかった。ネッカチーフの色がいろいろで印象的だった。

ロシア語も片言ながら分かるようになったころ、山の中でソ連将校と大勢が輪になって話したことがあった。私は、満州でたばこ、鉛筆、手帳、体温計などをソ連兵に取られたことを思い出して、抗議する気持ちで話した。「ロスキー、ニエツトハラシヨ（ロシア人はよろしくない）」と言ったのである。そうしたらソ連将校は笑いながら言ったものである。それは、ソ連では国民も兵もすべての人たちが不自由な生活をしている。その反面には兵器をたくさんつくっているのだ。

飛行機、戦車、大砲、その他武器がなくて何で戦争に勝てるか。国民は空き缶で水を飲み、空き缶で物を煮て食っている。婦人は畑で綿をつくり、糸をとって衣服をつくる。自動車の積み込みや、麦をつくりパンも焼く。牛を追って牛乳をとり、馬鈴薯、キャベツもつく。砂糖大根をつくって砂糖を生産する。男は戦場に、工場に働いて戦争に勝ってきたのだと、半分はわからなかったが、作文した演説みたいな口調で言っていたので、恐れ入った。

#### 十六、共産教育

秋ごろ、大きなラーゲルへ集合させられた。二棟も三棟もあった。そして、日本兵は皆満服を着ており、疲れきったひげ面の男たちが千人くらいもいた。

何も作業はなかったが、毎日草原で円陣をつくり、日本軍服を着た日本人が真ん中で演説をする。その円陣は何十カ所も行われていた。そして言うことには、自由なソ連、偉大なるソ連とかと話していた。そして日本は今、アメリカ兵が日本女性をめかけのようにしていたりして、全国アメリカ兵でいっぱいであり、我々

は日本に帰るのではなく、日本に上陸して戦わなければならぬとも言っていた。そして最後は全員で労働歌を歌って解散する。この集会在毎日続いた。そして日本新聞と称した小型の共産新聞が配られた。演説していた兵もパンのためであろうか、またソ連に命令されていた者であろうか……。

そして多くの捕虜たちは黙っていた。聞いているのか聞いていないのか、分からなかった。私も一応は聞いたが、何を言っているのか覚えてはいない。余りばかばかしいからである。だが、これに参加しないとダモイ（帰国）できないと言っていたので、毎日輪の中へ入っていた。ただ一つだけ気になることがあった。

それは敗戦によって我が国はアメリカに自由にされるであろう、もちろんアメリカ兵も来てるだろう、帰国はしても昔のようではないと思った。それは、日本の最近の状況などは何一つ知らされてないので、全くわからなかったからである。私たちには大きな不安があったことは事実であった。

しかし、このような中で日本兵を共産教育すること

について、何か間違っているという気がした。それは我々を強制抑留し、最悪の環境での重労働でさんざん苦しめた上、多数の病死者を出しておきながら、今さら偉大なソ連でもあるまい。本当に教育するのなら、大国らしく日本人を大切にして国内を見学させ、その実態を見せて日本兵の共感を得るべきであろう。生き残りの骨と皮ばかりとなった者を教育するなんて、一時の気まぐれもいいところであろうと、私は腹が立つて仕方がなかった。

そして、ダモイ（帰国）に近いことはみんなにわかってきたし元気が出たようだった。私たちにはまだダモイの順番は来ないで、また山へ戻された。今度は林の中で伐採した後の切り株の整理作業であった。

今のままならもちろんトラックは入れない。細い木は根元から切れているが、少し太い木は高目に切ってあった。そして切り口を見ると一段、二段と苦労した跡が歴然として残っていた。切り株整理は案外手間取った。そしてまた雪が降り出してきた。雪が降るようなときは、山と積んである枝を燃すようにした。大き

な火が燃え上がると、皆集まってきたダモイの話になった。今度は、聞かなくとも自然に故郷の話が出ていた。だが、みんな家庭のことで頭がいっぱいであったのか、弾んだ話にはならなかった。そして切り残しの木を切ったり、丸太を積み直したり、枝の山を燃したりして冬を越した。

#### 十七、ダモイ・ナホトカ集結

三度目の春となったが、今度は林へ入ってツツジの花も探さず、静かな帰国を待つ身となった。故郷へ帰りたい！ 早くシベリアより脱出したい。振り返れば、随分長い苦しい年月であった。

ダモイの命令が出たらしく、暖かくなってきた山のラーゲルを出発した。もちろん荷物もなく体も軽くなっていたが、気持ちは軽くはなく重苦しく、一步一步と歩いた。昭和二十三年五月ごろと思う。そしてまた貨物列車に乗ったが、入ソのときとは違って、今度は貨車内に便所はなく、ドアも自由に開けることができた。列車は夜も昼も走り、ナホトカ行きであった。

ある夜中に私どもの輸送列車が停車していると、コ

ツcottと車輪を検査するハンマーの音が近づいてきた。ドアを少しあけて見ると、広い駅構内であった。見ると、真つ黒な布で顔を包み長いスカート姿の婦人がカンテラとハンマーを持っていた。年齢はわからないが、カンテラで私の顔を照らし「ダモイ東京」と言う。私も「スパシーボ、マダム」と言い返して別れたが、これがソ連人との最後の言葉となった。

昼間、列車が長く止まっていたことがあった。どうしたのだろうかと思っていたら、私たちの仲間が盲腸になって手術していて、終わるまで発車しないのとことだった。なるほど、大陸的なところもあるなと思った。外を見ると、一本の木もない草山で牛が一頭のみり草を食っていた。

貨物列車は、チタ市あたりから二十日間もかかってナホトカへ着いた。下車して歩き出したら海が見えた。船も見えた。五年ぶりに見た海は青かった。そして空も青空だった。

ナホトカの港に近いところにテントがたくさん並んでいて、大勢の日本兵が集結していた。指定されてテ

ントに入った。そして落ちついた。それから軍服が支給されて日本の兵隊になった。散髪もした。爪も切った。食事も軍隊並みとなり甘味品も出た。翌日からは道路を隊を組んで行進し、小石やごみなどを拾って片付けて労働歌を歌って歩いた。船待ちの日が一月近く続いたような気がした。

ようやく乗船命令が出た。大きな船に板をかけた橋を渡ってゾロゾロと乗り込んだ。中へ入ると甲板はなく、船底が見えた。「信濃丸」という輸送船であった。何百人乗ったか夢のようでわからないが、中で座っていたら、いつの間にか船は港を出ていた。

甲板らしいところへ出て海を眺めていたら、波の上へ海草や木の板がもまれていて、船は日本海を南下していた。後方のソ連なぞ見なかった。わざと見なかったのである。そしてナホトカ港とソ連に別れることができた。船の中で座って見ていると、船の乗組員の若者が慌ただしく働いていた、が、よく見ると長髪であった。女かなと思ってもみたが、男の若者であった。これにはちょっと驚いた。

そのうちにふろへ入れと言う。船の中に木でつくったふろがあつて、十人くらいは入れた。何年ぶりの日本式ふろであり、嬉しくなつて私たちは何回も顔を洗つてにぎやかになつた。そして船のエンジンの音を子守歌のように聞きながら、眠りこけてしまつた。

#### 十八、日本上陸と舞鶴

何時間か、一日じゅう乗つていたか分からなかつたが、日本が見えるという声で起き上がり、かなたを見ると緑の山々が見え、懐かしい故国が見えて、船は舞鶴沖に着いた。

やがて小船に乗るとき、海面近くに風船のようなクラゲが無数に浮いていた。桟橋に着くと、大勢の人たちが並んでいた。看護婦さんたちも見えて、みんなが「ご苦労さま」と言ってくれたが、だれも返事もせず、手も上げずに黙々として上陸した。午後のような気がした。私たちには共産教育を受けた集団の日本上陸というような気持ちと、何か敗戦後の故国に帰つたという時代的なおかしな違和感があつて、懐かしい故国の土を踏んだ喜びとか感激とかはなく、ただただボーッ

として歩いてゐたのだった。

舞鶴の復員局は広かつた。そして輸送船ごとに復員手続が実施されてゐたようだった。私には畳の広い部屋がまぶしかつた。畳の上に座つてみたら、一枚の畳がとても広かつた。そしてキョロキョロとあたりを見回してゐた。

昭和二十三年六月二十七日であつた。ふろへ入れと言うので大勢してふろへ行つた。そうしたらそこにアメリカ兵がいた。初対面であつて、変な気持ちで落ち着かなかつた。ふろから上がると、アメリカ兵が白い粉をみんなの頭からかけた。そして衣類にも真っ白にかけた。そして別室に呼ばれ、数人の米兵や看護婦さんたちから注射されたが、両腕や胸へ六本も打たれてびっくりした。

私には故国の第一歩を印すまで信じられなかつた光景が、この復員局で見られた。それは看護婦や調理場の男も女たちも真っ白い服装で、しかも明るい顔で元氣よく働いているのを見てうれしかつた。共産教育では何を言つてゐたのか、全くのでたらめであると思つ

た。五年ぶりで復員局で畳の上で毛布を着て寝たが、よく眠れなかった。

復員事務はいろいろの手續などで三日くらいかかった。そして八百円支給された。この五年間に金はほとんど使わない生活なのに、金持ちになったような気分だった。だが、眼鏡を買ったら三十五円もしたし、タオルや下着、その他日用品を買ったら百円札は少なくなった。

ほんやり座っていたら、私の名前を言つて一人の兵隊が訪ねて来た。「だれですか」と聞いたら、湯沢の岸野だと言う。しばらく考えてみたら、同じ町の岸野長雄さんだった。一船早く上陸していたのである。余り突然な再会であつたのでまごついてた。どうやら頭の中が現実に戻り、夢から覚めたようだった。嬉しかった。ここで会おうとは！ そしていろいろの昔話やラーゲルの話をしたと思うが、何を話したか、何を聞いたか覚えていない。全く意外な舞鶴の再会であつた。その岸野さんとは、現在、全抑協湯沢支部会で一緒になって戦っているのもご縁である。

岸野さんが別室へ行くと、今度はうれしくなつて隣にいた人と話を始めたが、この人は広島荒木さんと言つた。それ以来、荒木さんとは今日まで文通している。

復員してから何年か後に、彼の家を訪問した。そして宮島へご夫婦で案内してくれたり、広島原爆記念公園へ案内していただき、いろいろと当時の状況などを説明してくれた。特に原爆資料館では深い悲しみの連続だった。そして、東南アジアあたりの若い女性が多い、国際的な館内だった。

そして奥様はお茶の先生で、私にお茶を立ててくれたが、私は作法も知らないのと言つたら、荒木さんが両手でグイと飲み、「これでいいですよ」と言つたので三人で笑つた。そして奥さんがもう一服と言うので、二杯目をいただいたことがあつた。

#### 十九、ふるさと列車

岸野さんは手續が済み、一足先に湯沢へ。

そのころ福井県に地震が発生、被害が出て、列車の予定が狂つて二日間も足どめをさせられた。そして列

車の都合ができたようで出発した。

乾パン三日分と七つボタンの服などが支給されて、列車に乗り京都へ向かった。私たち復員者は一般の車両へ入れず、荷物車に二十人ばかり乗せられた。これは、私たちはまだボーツとしているので、わずかの荷物でもほかの乗客に取られるからという配慮からであった。

京都へ着くと、町の中にはぎやかで戦前とは変わらないように思った。そして町の中に仮舞台がつくってあって、京都の舞子さんが踊りを見せてくれたり、お茶の接待を受けた。

また、列車の荷物室に乗っていたら、ある駅から日赤の看護婦さんたちが十五、六人、私たちの荷物室に入ってきた。一目で復員者とわかったのか、いろいろと話しかけてきた。私たちもいろいろと聞きたいことを聞いた。そのとき、一人の看護婦さんが「どちらまで帰りますか」と言うので、「新潟県の湯沢村だ」と言ったら、突然大きな声で「それでは、うちの南雲隊長さんと同じところですよ」と言ったのでびっくりした。

その南雲隊長とは私の母の実家の長男で、近衛兵として入隊し、私が出征するときは第一陸軍病院の事務長をしていて、私が訪れたときいろいろと軍隊のことから聞かせてくれた。そんなことを思い出して、隊長に会いたいと言ったら、私たち看護婦は災害地への先発隊で、隊長一行は一汽車おくられて来るとのことではなかった。そして柿ようかんを買ってきてくれたが、間もなく別れを惜しむように彼女たちは下車した。

列車が進み、仲間は一二人と別れて、上越線に乗りかえたときはただ一人となった。そして、約四年十カ月ぶりで湯沢駅に降りた。

駅には親類の滝之沢みかど屋さんのおばさんと子供たち七、八人が出迎えてくれた。そして懐かしの我が家に着いた。一家健在であって、ようやく落ち着いていたが、子供が一人足りなかったのて聞いたら、二十年の夏、病気で死亡していたと言う。手紙で知らせてあるはずだと妻は言ったが、その当時の満州では終戦の大混乱であり、手紙など受け取るどころの騒ぎではなかった。そして母や妻の食糧不足などの苦勞話が長々と

続いた。

家へは金三十五円と七つボタンの服一着と乾パン少々出したら母は泣いていたが、体一つでもと無事を喜んだのである。そして子供たちは、五年の歳月で忘れていたか、私のそばへはだれも来なかった。

ある日、警察の人が私服で来て、いろいろの話を聞かせてくれと言ってきた。最初のうちはいい気になってシベリアの話をしていたら、その後三回も同じ人が一人で来たので、用があれば警察でもどこでも行くから家へは余り来ないでくれと断った。たびたび警察から来られると近所の手前もあるからである。それから来なかったが、捕虜の調査ではなく思想調査であつて、私は無性に腹が立った。

後日、県の援護課から引揚げの調査用紙が送られてきた。その中の死亡者の欄に清野君と大阪の若者のことを書いたが、大阪の若者については、名前も住所も聞いてなかったので書きようがなかった。

私は長いシベリアの抑留から解放され、敗戦後大混

乱の故国にようやくたどり着いたことを痛感した。

我々ソ連に抑留された者 五十七万五千人

病氣などで送還された者 四万六千人

ソ連内で死亡した者 五万五千人

昭和三十年年度まで引揚者数 四十六万四千人

ソ連国内の日本人収容ラーゲル数 八百五十五地区

私どものラーゲルは、チタ第二十四地区という。その

二十四地区内にも、大小、また山小屋式まで無数に

点在した。そして伐採部隊であつた。

なお、各地区ラーゲルでは、作業内容は全部違つていたのである。

## シベリア抑留記

岐阜県 伊藤 武

### シベリア連行

昭和二十年八月十七日、中国の開原でソ連軍と八路軍により武装解除を受け、肩章も外され部隊組替えを